

窓

論説委員室から

トヨタの里山開発

トヨタ自動車が、愛知県豊田市の本社近くで計画する巨大なテストコース新設をどうするかが注目されている。

6600畝の山林や田畑に5千人の研究施設を造る計画だ。地元は大乗り気で、県や市も協力しているが、自然保護団体から待ったがかかった。開発が保全かでもめた愛知万博の会場より広い。とても認められない、という。

ここまでなら、ほかにある開発対保護の対決話。その後が興味深い。

トヨタの対応は早かった。コースの位置を変えて造成面積を4100畝から2800畝に絞った。絶滅危惧種の猛禽類の営巣区域などは手をつけない、という。

自然保護側も粘り腰だ。買収後に予定地内の水田耕作が放棄されれば、えさの

カエルも減って猛禽類も生きていけない。里山の生態系全体を維持する方法を考えてもらいたい、と切り返した。

トヨタにとって悩ましいことに、着工予定の2010年は、生物多様性条約締結国会議が名古屋市で開かれ、国際環境NGOが大挙して集まる。そこで環境破壊企業と名指しされる事態は避けたい。さらに突然の大不況。今のところ「予定通りすすめる」というが、注文通り里山の宿題まで解けるかどうか。

現地に行ってみると、棚田に草が生い茂っていた。手入れされていない人工林は日が差さず真っ暗だ。たしかにトヨタが手を引けば、もっと荒れていくかもしれない。里山にとって何が一番か。これはなかなかの難問だ。

〈伊藤智章〉